第 39 号

県中教研 英語部会だより

発 行 日　令和6年3月
発 行 所　富山市千歳町1－5－1
富山県中学校教育研究会
編集責任者　佐々木友紀
題　　字　金山　泰仁　先生

思考力・判断力・表現力等の育成を目指して

指導主事　中谷　吉孝

今年度、「コミュニケーションを行う目的や場面、状況等を明確に設定する」ことが意識された言語活動を設定した授業を多く拝見しました。中でも印象に残っているのは、自分たちが体験したことを共通の話題とし、互いの考えや気持ちを伝え合う授業です。本単元のゴールである「交流のある海外の学校の生徒たちに、自分たちの体験について話す」という活動に向けて、話す内容を整理することが本時の活動の目的でした。途中、先生は活動をいったん止め、ある表現について既習事項を使ってどう言えばよいかと投げかけました。すると、生徒は、近くの友達と「こう言えばいい。こんな風に言い換えればいいかも。」と相談し始めました。先生は一人の生徒の声を拾い上げ、“Please tell us your idea.”と声をかけ、全体で表現を共有し、口頭練習をしました。その表現を生かしながら、生徒たちは、相手を替えてやり取りを何度も繰り返し、話す内容と表現をよりよいものにしていきました。自分の考えを伝え合っている生徒たちの姿は生き生きとしていました。

思考力・判断力・表現力等の育成に向け、相手の興味・関心に応じて伝える内容を考えたり、聞き手の理解の状況を確認しながら話したりするなど、相手に配慮しながらコミュニケーションを図ることができる授業展開になるよう、今後もさらなる工夫が求められます。この工夫によって、生徒が教室から社会という実際のコミュニケーションの場に出たとき、授業で培ってきた「コミュニケーションを図る資質・能力」を発揮することにつながると考えます。

（西部教育事務所）

英語を通して、何を育てたいか

部長　佐々木友紀

働き方改革が学校の世界でも叫ばれるようになって久しくなりました。この数年で、英語科に限らず若手の先生方が増えています。そして、学習専用端末を活用した授業や、デジタル教科書を生徒個人で活用した取組の研究が行われるようになってきました。そして、授業動画や英語の勉強法等様々な動画が動画サイトにかなりアップされています。つまり、生徒は「勉強したい」と思えば、昔とは違ってCDラジカセではなく、いろんな手段を吟味して、勉強できるわけです。教える側の私たちも会場に出向かなくても私的に参加できるオンラインでの研究会が増えています。そんな状況の下、私たちはいわゆる中学校の授業では何を目指していけばよいのでしょうか。

現行の学習指導要領になり、３年になろうとしています。観点が４つから３つになり、ベテランになればなるほど、評価の仕方がなかなか変えられず今までの評価方法から脱却できていないという現状があります。ベテランをとまどわせるのは３つ目の観点「主体的に学習に取り組む態度」です。様々な研修会で、大学の研究者や指導主事の先生方から教えをいただく機会が増えてきています。それでも声に出して聞きたくても聞けないのが「先生方は何をもとに、どのように評価しているのだろうか」ということです。私の所属する高岡市中教研英語部会では、毎年、部員の先生方全員が実践事例をＡ４版１枚にまとめたものを提出し、年度末に冊子にして全中学校に配付、共有しています。令和５年度は今まで何となく避けて通ってきた３つ目の観点「主体的に学習に取り組む態度」に関する事例を募ってみました。この部会だよりが発行される頃にはきっと、今まで漠然とした不安を抱えながら評価していたこの観点への学びができていることでしょう。

保護者の方から、「ちょっと前までは１年生は最初の頃はみんな高得点で平均が高かったのに、子供の１年の教科書を見たら内容が盛りだくさんでびっくりした。」と言われたことがあります。私たち英語教員は、ベテランほど今までいろんな英語教育の波を乗り越え順応してきました。これからも英語を通して子供たちに何を学んでほしいか、を忘れてはならないと思っています。

（高・中田中）

第67回研究大会報告

■新川地区

新川地区大会では、舟橋村立舟橋中学校を会場に、柄崎安弘教諭、Ｔ２として作田恵美教諭、ALTゼイビア・セルバンテス先生による１学年の研究授業が行われた。

先生の自宅を訪問し、冷蔵庫の中の写真を見た上で、思考・判断し、即興で相手に依頼や提案をするという授業であった。先生の自宅を訪問するという場面設定は、生徒にとって魅力のあるものになっていた。即興での会話に苦手意識をもつ生徒もいることが想定されたが、ALTとのオーラルインタラクションを通して十分に復習することで、どの生徒も自信をもって言語材料となる表現を使うことができた。更に、ほとんどの指示が英語で出され、発表の機会も多く設けられていたので、生徒は様々な表現に触れることができた。

部会協議①では、付箋を用いてグループ協議を行った。学習した表現や語彙を実際の場面で活用させるための課題設定の在り方や、即興で会話を継続させたり、発展させたりするための教師の支援の工夫等について多くの意見が出された。大前奈津子指導主事（東部教育事務所）からは、言語使用の目的を明確化し、そのゴールに向かうための学習過程の在り方や教師の具体的な支援方法、言語活動を行う上での中間指導の大切さ、ルーブリックの活用の仕方等について助言をいただいた。

部会協議②では、「学習者のための小・中連携の在り方」と題し、東京学芸大学教職大学院教授の粕谷恭子先生から、小学校英語教育の現状や課題についてご講演いただいた。「ただ文字を読み上げるだけでは、話すとは言えない」という先生のメッセージに加え、言語使用の根底にある「思い」や「意味」を大切にして「生きた英語」を指導していく重要性等、これからの授業改善の視点として多くの示唆をいただいた。

長谷川理紗（滑・滑川中）

■富山地区

富山地区大会では、富山市立八尾中学校を会場に、和泉澤浩教諭とALTジェームズ・ダルジェル先生による２学年の授業、松尾湧斗教諭による３学年の授業が行われた。

２学年では、「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」で経験した内容等をマレーシアの中学生に伝えることを目的に、生徒同士や参観したALTと対話練習を行った。「14歳の挑戦」を終えたばかりであった生徒たちは、伝えたい気持ちにあふれていて、意欲的に取り組んでいた。相手を替え、粘り強く繰り返し対話することで、自信をもってやり取りできたように思われる。

３学年では、八尾町在住の外国人に安心・安全に生活してもらうために防災マップを作ることを学習課題とした。生徒が作成したものは公共の場に掲示されるということが示され、生徒は表現や視覚的にも分かりやすいものを作成しようと意欲を高めていた。

２学年の部会協議では、帯学習で行っていた対話練習の効果や、即興でやり取りをする手立て等について意見交換した。浦田栄信主任指導主事（東部教育事務所）からは、効果的な中間指導の在り方や、即興で伝える力を身に付けるための工夫等についてご指導いただいた。また、全国学力・学習状況調査では「話すこと」に前回に引き続き課題がみられたことから、言語活動を通してコミュニケーションを図る資質・能力を育成してほしいと助言をいただいた。

３学年の部会協議では、前時までの学習やゴールまでの指導の工夫について協議した後、中谷吉孝指導主事（西部教育事務所）から、「目的・場面・状況」の明確化や、モデル文を通して単元末のゴールを生徒と共有することの大切さ、ねらいをもった中間評価、振り返りシートの活用等についてご指導いただいた。

志賀　靖子（富・和合中）

【研究主題】　コミュニケーション能力を養うにはどのように指導したらよいか。
－聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して－

■高岡地区

高岡地区大会では、高岡市立南星中学校を会場に、平瀬正樹教諭とALTモリー・ブライアント先生による１学年の研究授業、大窪翔子教諭による２学年の研究授業が行われた。

１学年の研究授業では「ショッピングモールで迷っている外国人に、目的地への行き方を案内しよう」という学習課題のもと、生徒は、道を尋ねてきた人の状況が書かれた内容カードをもとに、目的地までの行き方を思考・判断し、既習表現を用いながら何度もペア活動を行った。生徒が英語を話す必要感をもち、意欲的に学習に取り組むための手立てとして、内容カードを用いたり、実際のフロアマップを用いたりしたことは有効であった。

中谷吉孝指導主事（西部教育事務所）からは、研究授業の内容と関連付けながら「目的や場面、状況を明確にしたコミュニケーション活動の工夫」や「中間指導、振り返りの充実」、「指導と評価の一体化」について助言をいただいた。

２学年の研究授業では「成長した現在の自分の姿を小学校のALTの先生にビデオレターで伝えよう」という学習課題のもと、グループ毎にビデオレターの撮影を行った。前時にトライしたビデオレターを見て、よかった点や改善点を全体で共有したことが、その後のグループ内での内容の推敲や音声面での練習等に生かされていた。

川井祐美主任指導主事（西部教育事務所）からは、「言語面と内容面の精査」「個別指導やリフレクションの必要性」について助言をいただき、今後の授業改善に向けて貴重な研修会となった。

山崎　拓郎（氷・西條中）

■砺波地区

砺波地区大会では、南砺市立井波中学校で松岡香苗教諭とALTのボズワース・マクシミリアン先生による２学年の研究授業が行われた。

学習課題を「『14歳の挑戦』で学んだことや今後がんばりたいことを伝えよう～聞き手に分かりやすい表現を学び合い、自分のスピーチをよりよくしよう～」として授業を行った。生徒は伝える内容をマッピングを基にして構成し、ペアで伝え合う活動を通して自己調整をし、スピーチを改良していった。活動の中では、帯学習で扱った表現をスピーチの参考にする生徒もおり、単元を見通した授業デザインとなっていた。また、ペア同士でお互いのスピーチをタブレットで録画することにより、課題や変容に気付くことができていた。

部会協議では、付箋を活用してグループ協議を行った。評価の視点を生徒に分かりやすく示すことや教師がファシリテーターになること等、これまでの研究授業等で挙げられていた課題に対して、示唆に富んだ学びの多い授業であった。

水上美淑指導主事（西部教育事務所）からは、「言語活動の目的、場面、状況が設定されており、生徒が実際に体験したことを表現できていた」「学び合いの中で、既習表現を教科書で確認したり、教師が間違いを正す時間を設定したりするとよい」と助言をいただいた。

また、とやまグローバル人材育成促進事業により、岐阜大学教育学部准教授の瀧沢広人先生による講義を聴講した。「学習指導要領を踏まえた効果的な指導と評価の在り方」と題し、言語活動の在り方や子供の主体性や表現力を高める工夫について、事例や体験等を交えて教えていただいた。英語表現の習得のための練習は大切であるが練習と言語活動は異なること、生徒同士、生徒と教師が英語でやり取りを行う言語活動においては、自分のことについて表現させることが重要であること等、これからの授業を改善する上で多くのアドバイスをいただいた。大変学びの多い大会となった。

松田　恵美（小・大谷中）

各地区の取組から

高岡市中教研「本年度の取組から」

高岡市中教研英語部会では、研究主題に基づき、各学校において研究実践を重ねている。そして、その事例を高岡市中教研英語部会研究推進委員会が中心となって１冊にとりまとめ、高岡市内全中学校に配付し、事例の共有を図っている。今年度は実践事例の視点を、『主体的に学習に取り組む態度』をどのように評価し、指導に生かしているか」とし、さらに、①「聞くこと」及び「読むこと」の領域における授業実践と評価　②「話すこと［やり取り］、「話すこと［発表］」及び「書くこと」の領域における授業実践と評価　に細分化した。

夏季休業中に合同で開催した英語科主任会と研究推進委員会では、９月の高岡市中教研大会、10月の高岡地区中教研大会の計３つの指導案検討を行った。各中学校から集まった20名近くの英語科主任と研究推進委員を３グループに分け、よりよい授業を目指して、授業者と問答しながら指導案検討を行った。さらに、研究推進委員会のメンバーで８月の東海北陸大会の発表を行った。

９月の高岡市中教研大会では、五位中学校の古市彩夏教諭とALT レリョロサ・サラメイ先生が、ALTが示す旅行条件に合う旅行計画を個人で考え、グループの発表につなげるという授業を展開した。既習の語句や文を用いて伝えることを意識し、友達の旅行計画と自分の計画を比べながら考えを深め、互いに教え合う生徒の姿が随所に見られた。

次年度も、主任会や研究推進委員会が中心となり、研究の方向性の検討や、指導案の検討、高岡市恒例の高岡市英単語コンテストの問題の作成等を通して、市内英語科教員の指導力の向上や授業力の向上を図っていきたい。

佐々木友紀（高・中田中）

射水市中教研「本年度の取組から」

射水市中教研英語部会では、研究主題に基づき各校で研究実践を重ねたり、定例部会での情報共有を行ったりしている。今年度は、「言語活動の工夫」として、帯学習を効果的に用いて既習事項の確実な定着を図りつつ、新たな学習場面で生徒の体験や考えと結び付けながら思考･判断させる方法について研究を進めた。また、「指導方法の工夫」として、生徒の興味を引くような課題を提示し、意欲をもって学習活動に取り組めるような言語使用場面の提示及びICT機器を効果的に用いた言語活動の在り方についても研究を進めた。

６月部会では、各校で実践している帯学習を持ち寄り、既習事項の確実な定着に向けた取組について情報交換を行った。各部員から様々な目的に応じた実践事例が持ち寄られ、実りある研修となった。また９月の研究授業についても検討を行い、授業者の考えているICT機器の活用について意見交換を行うことができた。

９月部会では、１学年の授業研究を行った。協議会では、授業者の提示した課題が生徒の興味を引くものであったことや帯学習による既習事項の確実な定着がみられたこと、その成果として、言語活動の中で既習事項が効果的に表れており、研究について一定の成果がみられたとの声が聞かれた。また、ICT活用についても、ムーブノートを使って、生徒が自身の作文の見直しに取り組んだり他の生徒の作文を参考にしたりと意欲的しかも効果的に活用していたとの意見が出された。

今年度の研修で共有した帯学習の実践や具体的なコミュニケーションを行う目的や場面、状況の設定についての取組の成果を次年度も引き続き活用しながら、新たな研修を進めていきたい。

亀田　健太（射・小杉中）

氷見市中教研「本年度の取組から」

氷見市中教研英語部会では、研究主題に基づき、授業改善と指導方法の工夫に努めている。小中連携を意識した授業、ICT機器を用いた提案授業を通しての授業研究を行った。

小中連携を意識した授業では、Small TalkやQ&A活動を小中で実践し、生徒が中学校の英語の授業にスムーズに取り組めるようにしている。また、市内の特産物や名所等を英語で紹介している冊子「We Love Himi 1, 2」を市内小中学校で用い、名所紹介や特産物紹介等に活用している。

ICT機器を用いた提案授業では、”Who is this ？”の授業の導入で、ALTがタブレットで絵を提示し、ヒントを伝え、教師が答えるというデモンストレーションを通して、生徒に授業のゴールを明確に示すことができた。また､何種類もの絵や写真を準備し､生徒のタブレットに送信することで､生徒たちはグループで、即興でヒントを出し合うことができた。ICTが、生徒が意欲的に活動に取り組むための手段として効果的であることが分かった。

他にも、生徒の作文例や質問、それに対する指導者の助言等を、ICT機器を使って全体共有した実践や、プレゼンテーションソフトを活用したグループ発表等が実践例として紹介された。

今後は、さらに小中連携を進め、ICT機器を効果的に用いて、生徒自身が課題を設定し解決する授業の研究を続けていきたい。

山崎　拓郎（氷・西條中）